

機関番号：18001

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520166

研究課題名（和文）戦後沖縄文学に関するジェンダー表象分析

研究課題名（英文）A Study on gender presentation of postwar okinawan literature

研究代表者

新城 郁夫 (SHINJOU IKUO)

琉球大学 法文学部・教授

研究者番号：10284944

研究成果の概要（和文）：

本件急の成果は、なによりもまず、2010年12月に刊行した『沖縄を聞く』（みすず書房）に収められた諸論考において明らかにされている。特に、本研究において展開された、戦後沖縄文学に見出せる、男性性の脆弱性、そして「沖縄の男」をめぐるホモソーシャルな欲望とホモセクシュアリティの否認といった観点は、戦後沖縄文学研究の新しい地平を開いた。戦後沖縄文学に見出せるホモソーシャルな欲望という視点から、沖縄という媒介を棄却しつつ成立する日米軍事同盟という「絆」の政治的力学を明らかにし、戦後沖縄文学におけるジェンダー表象分析と独自性と可能性を明証した点に、本研究の最も重要に成果がある。

研究成果の概要（英文）：

The result of this research was above all '*Listening to Okinawa*' published in December, 2010. Especially, the crisis of the masculinity of the postwar Okinawan literature is definitely important point in this study. In Addition, the aspect of negation of the desire concerning a man of Okinawa and the struggles of homoeroticism opened new horizon in the study of postwar Okinawan literature. Of course This research clarified the male homosocial desire of the Okinawan literature, And, this research clarified that the Japan-U.S. military alliance was composed through the negation of the desire to Okinawa. In this respect, the most important meaning of this research is thinking about the politics of homoerotic desire.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：日本文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：戦後、沖縄文学、ジェンダー、男性性、ポストコロニアリズム、軍事、占領、ホモソーシャルリティ、

1. 研究開始当初の背景

戦後沖縄文学に関しては、これまで日本近代文学研究の周縁的領域として研究されてきており、その学術的蓄積は多大と言える。しかし、戦後沖縄文学研究は、主に、作家論的研究や歴史的考察あるいは文学史的研究という形で整理される一方で、そこに働いているジェンダー力学は、あまり注目されることはなく、その研究は未だ十分とはいえず難かった。本研究は、そうした戦後沖縄文学研究において閑却されがちになってきたジェンダー表象を精緻に分析していくことによって、戦後沖縄文学の可能性を新たに考察していくことを目的とした。そして、このジェンダー表象分析という研究により、これまで作家主義的かつ男性中心主義的な視点によって考察されてきた戦後沖縄文学に新たな光をあてることが可能となった。

そうした研究展開により、第二次世界大戦戦中から沖縄の米軍占領から 1972 年の「日本復帰」前後の時期にかけての戦後沖縄に関わる文学作品が、どのようにジェンダー的権力的配置のなかで沖縄が表象され理解されてきたかという歴史政治性を明らかにすることが求められている事情が、研究当初の背景としてあった。

2. 研究の目的

戦後沖縄文学に関する研究は、今現在にいたるまで様々な方法論やアプローチによって展開されているが、そうしたなかで、戦後沖縄文学の独自性の最も重要な思考の契機となるべきジェンダー／セクシュアリティ批評からの分析研究は、十分なものとはいえない。本研究は、まさにこのジェンダー／セクシュアリティ批評の視点から戦後沖縄文学に内在するポストコロニアル文学としての特質と独自性を明らかにする目的を持つ

ている。その際、特に、男性身体や男性間の性的欲望あるいはホモソーシャルな欲望の分析と考察を重点的におこなうことにより、これまでの戦後沖縄文学研究さらには沖縄研究そのもの閉塞に亀裂を入れ、新たな思考を展開が可能となる。この展開を遂行していくことが、研究の主たる目的となる。

3. 研究の方法

本研究の課題と目的は、戦後沖縄文学をジェンダー表象という視点から分析していくことで、これまで閑却されてきた戦後沖縄文学が内在化するポストコロニアリズムの特質を明らかにしていくことにある。特にその研究に際して、ホモソーシャルな欲望という視点から戦後沖縄文学そして映画をはじめとする戦後沖縄文化関連テクストを分析していくところにその方法的特質がある。ホモソーシャルな欲望という概念については、E・K・セジウィックの『男同士の絆』や『クローゼットの認識論』あるいはジュディス・バトラーの『ジェンダー・トラブル』や『触発する言葉』といったクィア批評理論に拠るところが大きい。しかし、これらクィア理論の展開においては、ホモソーシャルな欲望という概念を、ポストコロニアリズムという歴史政治性のなかで考察するという視点はほとんど見られなかったし、日本語圏においてはほとんど皆無であった。そこで、本研究では、沖縄表象におけるジェンダー権力を分析し、そこに働くポストコロニアル的暴力と文化表象の関連性を考察し、そこから戦後沖縄文学の独自性を考察札することに方法的眼目をおいた。

こうした研究方法を具体化していくにあたって、大江健三郎及び大城立裕という、戦後沖縄を考えるうえで不可欠の表現者の文学作品はもとより、政策論として盛んに議論

されてきた『沖縄イニシアティブ』や第二次世界大戦前後の裕仁を描くアレクサンダー・ソクーロフ監督の映画『太陽』を考察していった。こうして、戦後沖縄文学に関連するテキストをも視座におさめて、そこに作動するホモソーシャル欲望が、ポストコロニアル空間としての沖縄ホの歴史政治性といかに交差するかを詳しく分析し論じていったのが本研究の方法だが、こうした研究方法を通じて、ホモエロティズムの権力的動態が戦後沖縄文学に特異な欲望の運動性をもたらしていく過程を明らかに、戦後沖縄文学がもつジェンダー表象の独自性を論証していくところに、本研究の方法の特質があった。

4. 研究成果

本研究の成果は、2010年12月にみすず書房より出版された『沖縄を聞く』に収められた書論考のなかに集約的に示されている。この書は、既に、『週間読書人』『朝日新聞』『沖縄タイムス』『琉球新報』『みすず』『インパクション』といった媒体のレビューにおいて高い評価を得ており、本研究が三年間にわたって考察し論文化してきた成果が、戦後沖縄文学研究はもとより沖縄に関する思想・文化史研究にとって有用な知見を持たらし得たことが明らかにされているといえよう。たとえば、本書に収められた書き下ろし論文「受信される沖縄—ソクーロフ『太陽』」においては、日米軍事同盟の構築にあたり同盟的絆の媒介として欲望されながら、この欲望を否認する形において棄却されていく沖縄の政治的位置性の問題を、ホモソーシャルな欲望の政治的力学という視点から考察している。また、同書に収められた書き下ろし論文「大東亜という倒錯—大城立裕『朝、上海に立ちつくす 小説『東亜同文書院』』は、日本アジア主義の矛盾を担っていたともい

える東亜同文書院を舞台とする大城立裕の小説『長、上海に立ちつくす』を取り上げ、特に「沖縄の男」のセクシュアリティ的混乱とホモエロティズムの濫喩性において分析読解したものであり、植民地の男性セクシュアリティから戦後沖縄文学を問いなおす論考として希少な例といえるだろう。

このほかに、編著『攪乱する島 ジェンダー視点』（シリーズ『「沖縄・問いを立てる」第三巻、社会評論社、2008年』）において「序論 性支配のレトリック」と「母を身籠もる息子—目取真俊『魂込め』論」の2論文を発表したが、この論においても、従来の沖縄文学研究のなかでほとんど考察されてこなかった男性セクシュアリティの歴史政治的力学を分析し、その分析から沖縄文学研究に新たな可能性を導入するものとなっている。関連して、「〈帝国〉の岬再領土化される帝国主義的突端—縁から」（『現代思想』2008年5月号）や「「反復帰反国家論の回帰」（成田龍一他編『戦後日本スタディーズ(2)』紀伊国屋書店、2009年）、あるいは「音の輪郭—高橋悠治の音楽とイトー・ターリの身体パフォーマンスを繋ぐ場所」（李静和編『残傷の音—「アジア・政治・アート」の未来へ』岩波書店』2009年）や『〈生=セクシュアリティの技法〉の倫理—晩期フーコーの主体化概念の現在化に向けて』（『現代思想』2009年6月号）などの論文を発表したが、これらはいずれもが、身体あるいはセクシュアリティという視点から文化表象や沖縄をめぐる文化=政治的位相の特質を明らかにするものとなっている。これらの研究成果は、戦後沖縄文学研究のみならず戦後沖縄思想史あるいは沖縄文化史研究の分野の新たな展開に寄与するところ少なくないが、そのことは、上記の研究を踏まえた新たな沖縄研究論文が既に幾つか提示されている事実からも知られる。

これらの研究を通じて、戦後沖縄文学におけるジェンダー表象の特異なあり方とその可能性についての考察を展開することができたのが、本研究の何よりの成果といえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

- ① 新城郁夫、「不安定の弧」の対位法、『現代思想』、査読無、39 巻 4 号、2011、pp229-239。
- ② 新城郁夫、日本クィア映画論序説、四方田犬彦編『日本映画は生きている 第4巻 スクリーンのなかの他者』、岩波書店、査読無、2010、pp113-140。
- ③ 新城郁夫、反復帰反国家論の回帰、成田龍一他編『戦後日本スタティーズ(2)』紀伊国屋書店、査読無、2009、pp61-84。
- ④ 新城郁夫、音の輪郭-高橋悠治の音楽とイトー・ターリの身体パフォーマンスを繋ぐ場所、李静和編『残傷の音-「アジア・政治・アート」の未来へ』岩波書店、査読無、2009、pp21-41。
- ⑤ 新城郁夫、<生=セクシュアリティの技法>の倫理-晩期フーコーの主体化概念の現在化にむけて、現代思想、査読無、37 巻 7 号.2009、 pp138-152。
- ⑥ 新城郁夫、母を身籠もる息子 目取真俊『魂込め』論、新城郁夫編『沖縄・問いを立てる 3 巻 攪乱する島-ジェンダー的視点』社会評論社。査読無、2008、pp196-227。
- ⑦ 新城郁夫、序論-性支配のレトリック、査読無、新城郁夫編『沖縄・問いを立てる 3 巻 攪乱する島-ジェンダー的視点』社会評論社。2008、pp9-24。

- ⑧ 新城郁夫、〈帝国〉の岬 再領土化される帝国主義的突端=縁から、現代思想、査読無、36 巻 5 号. 2008、pp146-151。

[学会発表] (計1件)

新城郁夫、「大東亜」という倒錯—大城立裕『朝、上海に立ちつくす 小説東亜同文書院』におけるジェンダー・トラブル" 国際シンポジウム「イメージとしての戦後」.(2009、1・11). 名古屋大学(愛知)

[図書] (計1件)

新城郁夫、みすず書房、沖縄を聞く、2010、237 頁

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

○取得状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

新城 郁夫 (SHINJOU IKUO)

琉球大学・法文学部・教授

研究者番号：10284944

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：